CO闘争の中から

願いはただ体をもとにかえして……それでも闘いはまなびました

第十二回

万田訓練所で回復にはげむ浦田譲次さん（三十二才）宅をたずねて

浦田さんは、膝に抱いた子どもが、ちよつとでもむずがると、途端に頭にきていらいらする。平常は何でもないのだが……

現在、万田回復訓練所（大牟田労災療養所荒尾回復指導所）で訓練をうけている浦田譲次さんは、昭和四十一年十一月に労災補償を打ち切られて以来、労災病院での自主訓練、三池労組での入院生活をへて現在にいたっている。浦田さんは現在でも十日に一回はおこる全身ケイレンに悩まされ、左半身の口、手、足がふるえることに悩まされつづけているのである。

汽車の中でも

浦田さんは八月末、訓練所から長洲町の自宅に汽車で帰る途中、突然全身ケイレンに襲われた。汽車の座席に座っていながら突然全身がピンとのびきり、右足は異常な力で前の座席を下からけり上げ、腕は虚空をつかみ、意識をなくし、体中の筋肉は石のようにカチカチに固まり、ただ苦しそうな声を出しつづけるだけであった。

浦田さんが自分の状態に気がついたのは、やがて自分がおりるべき長洲駅の近くであったが、意識が回復しだすと、全身の筋肉に何千本という針をさしこまれるような激痛を感じはじめるのである。

「イタイ、イタイ」とうめく浦田さんに何人かの同乗の客が体をもんでくれ、車掌もとんできたがどうすることもできない。

「テンカンではなかごたるですね、あわはふきなさらんですね」とのぞきこんだ人が話しているのがぼんやりと聞こえてきた。浦田さんは駅を四つも乗りこしてやっと汽車から降りることができた。

浦田さんの発作はいまでこそ十日に一度のわりだが、以前は二、三日に一度は来ていた。それこそ時と場所をえらばずで、病院のベッドの上で襲われた時は一メートルも飛び上がって床に落下するので、ついに病院では床にタタミをしきつめ、ベッドをとりのぞき、周囲のカベにはマットを立てかけてケガを防いでいた。

フロに入っている時にはコンクリートで頭を打つか、湯ぶねに飛びこむことも再三である。もし、あわてて助け上げる人がいなければ、溺死ということになりかねない。

道路の上で発作をおこし、自転車からころげおちてあやふくバスにしかれそうになったこともあった。

それでも仕事はできるという政府

浦田さんは昭和三十八年十一月九日に三川鉱三十六昇の現場で被災後、十日の午前三時に救出され荒尾市民病院に入院した。翌日から急に頭が痛いと言い出し、一週間目くらいからまるで気が狂ったようにあばれ出した。突然ベッドから立ち上がって着物をぬぎすて、柱に頭をぶつつけに走り出す。毛布をきせてもすぐ脱ぎすてるといった状態だった。一週間くらいそういう様子がつづくと、しぜんにおとなしくなったが、一年くらいすると左半身のふるえがひどくなってきた。昭和四十一年八月ごろから全身ケイレンが襲い出し、ひどいときは一日に五、六回もかさなった。そんなときに浦田さんは労災補償を打ち切られた。安河内所長（大牟田労災）は理由を問いつめられて、「こんな体でも坑外の草むしりはできますよ」とうそぶいた。

浦田さんの症状はこれぱかりではない。COを吸うまでは鉱山学校や荒尾高校で生徒会長をつとめ、同人誌に創作をのせていた人望あつい人格と才能がすりへらされてしまったのだ。

イライラや短気、ものわすれは他のCO患者におとらずはげしい。年令はいくつですかときけば（奥さんの方をふり向いて）「オレはいくつかね」（奥さん）「昭和十一年生まれだからいくつかね？」（浦田さんはしばらく指を折ってかぞえて）「三十二才か？」（奥さん）「ウン」

浦田さんはあるとき、自転車にのって道を通っていたら強い風が吹いて帽子をとばしてしまった。草むらに入った帽子をさがしているうちに、はたしてその方向に飛んだのかな？　とわからなくなってきた。道にもどって考えているうちに、自分は帽子をかぶっていたのかわからなくなってきた。家においてきたかもしれないと思い出してとうとう家に帰ってきてしまい、帽子はとうとうわからずじまいになってしまった。

こわされた理想

浦田さんが奥さんの紀美子さん（三十七才）と結婚したのは昭和三十七年の十月である。結婚前の昭和三十五年十月の日記につぎのように書いている。

「私は妻となる女性を考えてみたことがある。その人はまず体が強健であった。そしてはかりしれない寛容な心を持っていた。顔は美しく知的であったし、すべてにおいて逆に私が指導されるような家政の魅力があった」

このような浦田さんの理想にピッタリとした紀美子さんとの生活に浦田さんははりきって仕事に出ていた。昭和三十八年三月十五日には長男の紀文ちゃんが誕生した。「紀は両親の名を一字つぎ、文は文化的な人間であるように」と命名の理由を浦田さんは日記に書いている。

昭和三十八年十一月九日の三川鉱大爆発はこの浦田さんの生活を一挙にふきとばしてしまった。

「事故で一生重荷を背負うたごたる。ガスを吸わされたばっかりに狂わされた」とポツリ。

もう一度闘つて

現在通っている回復訓練は出勤した日だけ四百八十円の手当が支給される。これが浦田さん一家五人の生活費である。これで約一万二千円たらず。これでは生活できないので三池労組が坑外の平均賃金（二万千円）との差額を補償している。政府と三井は一日四百八十円やるから、それで一家五人暮していけというのである。

八月は発作などがかさなって訓練に出る日が少なかったのでまた収入が下がった。生計は五十六才になる浦田さんのお母さんが仕事に出ておぎなっている。

「訓練に出ないと金がもらえないし、無理して出ると体がもてない。なんとか坑外の仕事でも他人についていけるようになればいいのですが」

「ガスのおかげで家庭がメチャメチャになってしまった。金がたらんのはどうにでもして補えるが体だけは良くしてもらいたい。せめて主人が安心して治療ができるだけのことはしてもらいたい」

「CO闘争でいろんなことを学びました。オルグにも行ったし、坑底すわりこみのときは子どもをかかえて組合に行きニギリメシを作りました。坑底に座りこんだ人と録音テープを交換してはげましあったりしました。お父さんが三池労組にいて、CO患者になったばっかりにいろんなことを勉強しました。私がそういうと〝オレに感謝せなんたい〟と主人は笑います。もう一度闘って安心して治療ができるようにしなければ…と思っています」と奥さんの紀美子さんは語った。

行動に参加した紀美子さん

犠牲者すでに一四四人

相次ぐ北海道の炭鉱災害

―北炭夕張で落盤―

【KNA】九月三日午後、北海道炭鉱汽船夕張鉱業所第二坑の坑口から二千五百メートル地点で落盤事故が起こり、八人が死んだ。

同社はさる七月三十日、平和鉱坑内火災事故を起こし、三十一人の犠牲者をだしたばかり。事故のあった夕張炭鉱はことしにはいって、落盤事故が三回もつづき、三人の命を奪っている。そのうち六月七日の落盤は、こんどの事故から三百メートル先の採炭現場でおきている。また、平和鉱の坑内火災事故では非常警報の遅れや保安教育の不徹底などが大事故をおこしていた。このため主婦たちは「危険個所を早く直せといっていたやさきの事故だけにゆるせない」と、保安無視によってふたたび災害を引き起こした会社に怒りの声をあげている。

北海道の炭鉱災害は、こんどの事故でことしにはいって百六件をかぞえ、百四十四人の犠牲者をだした。これは昨年同期の一・六倍にもなる。

炭労（五万八千人）は相次ぐ炭鉱災害に対して「政府・石炭資本は再三にわたって〝合理化〟を推進してきたが、それは保安無視と苛酷な労働条件を押しつけるなかで行なわれてきた。このなかで炭鉱災害が激発し、労働者の生命は無視されてきた」とのべている。

ことし北海道でおきたおもな炭鉱災害（一～九月）

月	日	炭鉱名	死者
一月二〇日		美唄炭鉱	一六
三一日		太平洋炭鉱	三
五月	九日	雄別炭鉱	四
一二日		美唄炭鉱	一三
六月	五日	滝口炭鉱	六
七月三〇日		北炭平和鉱	三一
九月	三日	北炭夕張鉱	八

被爆者一二三人が死亡

二十三回目の原爆記念日を前に広島、長崎の両原爆病院はそれぞれ、ことしの診療状況や死者数を発表した。

広島原爆病院では、ことしにはいってから六月三十日までに被爆者三十二人が死んだ。また同病院の発表した「原爆症患者白書」によると、開院以来十二年間の診察被爆者は三十一万四千百七十九人。うち三千三十九人が入院、一九・一％に当たる五百八十人が死亡している。

いっぽう、長崎原爆病院では昨年八月十日からことし七月三十日までの死者は百二十三人。

第二回職業病交流集会

第二回職業病全国交流集会が、九月二十一～二十三日の三日間、東京都南多摩郡稲城町の読売ランド・地方学生ホテルで開かれることにきまり、実行委員会では、けんしょう炎などの職業病に苦しむ多くの仲間の参加を呼びかけている。

ことしの集会は、全産業的な交流ができるように発展させるため春闘共闘委員会、社保協、安全センターなどに共催を要請、話し合いの結果、春闘共闘委員会または社保協が主催する「職業病全国交流集会」（仮称）の「げんしょう炎・腰痛症部会」として開かれる。なお集会では交流会と併行して「医療相談室」も設けられる。